

# さいたま地裁新聞

## 裁判官、高校新聞部からのインタビューに答える

高校生も裁判員に選ばれるかもしれない、そのことに不安を感じる高校生は多いのではないかと。そんな思いから、越谷北高校新聞部は、さいたま地裁に裁判官への取材を申し込んだという。

新聞部の真摯な質問に、秋保春菜裁判官(第1刑事部)が答えた。



インタビューに答える秋保裁判官(法廷)

新聞部から「人生を左右する判決を下すことに恐怖心はないか」という質問を受けた秋保春菜裁判官は、「判決を宣告するときはいつも緊張している」と打ち明けた。その上で「裁判員の方には、チームでの結論なので一人で背負わないでくださいと声をかけている」と説明した。「自分が下した判断を後悔したことはあるか」との質問には「裁判官になつて3年目だが判断を後悔したことはない。ただ、もっと分かりやすい裁判ができたのではないかと反省することはある。そこは法曹の責任」と語った。

### 「チームの結論、一人で背負う必要はない」

「チームの結論、一人で背負う必要はない」という質問に対しては「事件によっては被害者や被告人がかわいそうでショックを受ける方も中にはいる。その気持ちを一人で抱え込まないことが大事なので、審理の前後に気持ちを共有できる時間を作るなどしている」として、裁判所における配慮の取組みの例を紹介した。「世代が異なる人同士で考え方にギャップがないのか」との質問には「そのギャップが話し合いが充実する要素となっている」と述べた。「法律知識や社会経験の少ない十八歳が裁判員に加わることについてどう思うか」との質問には「裁判員は法律知識がないのが当たり前。社会経験は人それぞれ。その年代だからこそ見えるもの、言えることがある。今まで以上に若い人の視点が加わり、議論の幅が広がることを楽しんでほしい」と答えた。



真剣に質問する新聞部生徒3名(越谷北高校)

最後に、高校生に向けたメッセージとして「裁判員裁判は一つの事件を通じて皆さんの社会の中の役割を果たしていく場だと思う。社会に入る、大人になる第一歩として参加してもらつと良い機会になるのではないかと伝えて、インタビューを終了した。

インタビューを終えた新聞部の生徒の1人からは「正直怖い気持ちがあったけど、チームの結論だから一人で背負う必要はないという言葉に安心できた。もし選ばれたらやってみたい」との感想が述べられた。裁判所としても、現役の高校生からの率直な疑問や心配な気持ちを伺うことができた、非常に貴重な機会であった。

#### 発行所

さいたま地裁  
総務課広報係

浦和



越谷



川越



熊谷



秩父



裁判傍聴、法廷見学のお問い合わせは総務課広報係まで  
☎048(863)8945(平日午前8時半〜午後5時)